

【研究ノート】

保護動物飼育の阻害要因

岩 倉 由 貴*

1. はじめに

一般社団法人ペットフード協会の調査(2016)によると、全国の推計飼育頭数は犬が987万8千頭、猫が984万7千頭である。猫の飼育頭数は横ばいであるが、犬の飼育頭数は減少傾向にある。ペットの中心である犬猫の入手方法として、ペットショップやブリーダーからの購入以外に、動物愛護センターなどの自治体の施設や民間の動物保護団体から犬猫を引き取る、「譲渡」という方法がある。「犬及び猫の引取り並びに負傷動物等の収容に関する措置要領」では引き取りまたは収容した犬猫についてはできるだけ生存の機会を与えるように努めることとされている。譲渡される犬猫は「飼い主不明で保護されたり、飼育放棄等により引き取られたり、災害などで飼い主が飼えなくなった犬や猫」(環境省, 2016, p. 2)であるが、「譲渡は生存の機会を与えるための手段」である(環境省, 2006, p. 6)。

環境省によると2016年度では113,799頭の犬猫が都道府県等に引き取られ、そのうち44,259頭が譲渡、55,998頭が殺処分されている。各自治体では飼育者への啓発活動や譲渡会の実施などの譲渡推進の取組みが行われており、実際に引き取り数および殺処分数は減っている。例えば、10年前の2006年度では引き取り数が

374,160頭、返還数と譲渡数は合算であるものの、その数は33,369頭、殺処分数は341,063頭である。譲渡数は増えているものの、未だ生存の機会を逸する犬猫が多いのも事実である。

一般社団法人ペットフード協会の調査(2016)によると、愛護団体からの入手を検討した割合は犬猫共に増加している(犬:前年調査13.7%から14.6%,猫:14.3%から18.8%)。また、入手先をみても、犬の場合、譲渡¹⁾が2015年調査の7.5%から8.3%へ、猫の場合13.3%から16.4%と、実際に入手先としても譲渡は増えているが、一般的な入手方法として譲渡が確立しているとはいいがたい。

環境省では、「譲渡された後にそれらの動物が適正に飼養されるよう、譲渡対象の動物や譲渡者を適切に選定する必要がありますが、選定のための有効な指標等がないことが、譲渡の推進を阻んでいる大きな要因となっています」(環境省, 2006, p. 3)とし、『譲渡支援のためのガイドライン』を作成した。譲渡の推進において仕組み作りは有効であると考えられるが、同時に飼う側の保護動物に対する意識や理解度を知り、それに対応することも求められるであろう。筆者は保護動物のことを知らない学生に保護動物のイメージを自由に書いてもらったところ、ネガティブなイメージが多く挙げられた。同様

1) 当該調査における「里親探しのマッチングサイトからの譲渡」および「愛護団体(シェルターなど)からの譲渡」を譲渡とした。

* 横浜商科大学商学部准教授

の質問を保護動物を知らない学生以外に聞いても同じような回答が得られた。保護動物が身近にいない、あるいは保護動物を知らないからこそ、保護動物に対してネガティブなイメージを持っていると推測されるが、保護動物に対して良いイメージを持っていなければ譲渡の普及は難しく、入手方法としてペットショップなどから購入するという行動をとる可能性が考えられる。そこで、保護動物に対するイメージが飼育行動に影響するのではないかという問題意識のもと、本稿では保護動物に対するイメージの違いから保護動物の飼育を阻害する要因をアンケート調査より明らかにする。

なお、本稿で使用するアンケート調査は、今後、譲渡を普及させるためにはどうしたらいいのかという観点から、公益社団法人アニマル・ドネーションと筆者のゼミナールとの協働プロジェクトとして実施したものである。本稿ではその調査結果の一部を使用する。また、本稿は2017年8月27日に開催されたアニマルウェルフェアサミット2017（一般財団法人クリステル・ヴィ・アンサンプル主催）での講演内容をもとに作成している。

譲渡される動物は保護された動物ということから保護動物、あるいは犬の場合は保護犬、猫の場合は保護猫と呼ばれることが多い。本稿お

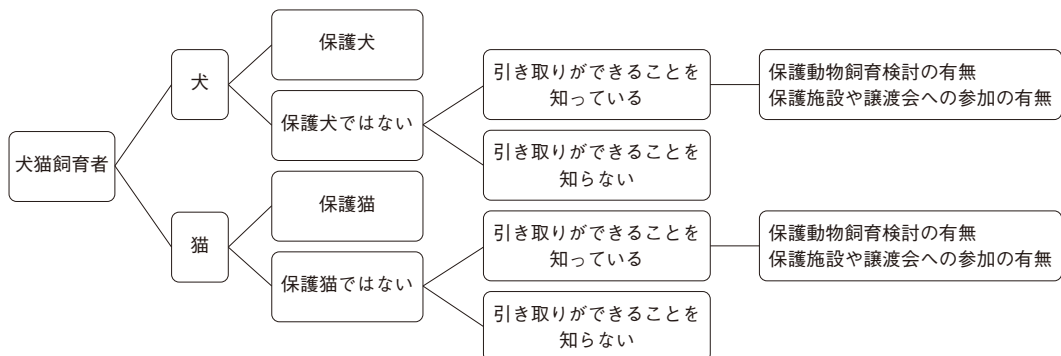
よびアンケート調査では、保護犬・保護猫を、飼い主に捨てられたり迷子などにより飼い主がいない犬・猫で、一時的に動物愛護センターといった行政の施設やボランティア団体（個人を含む）などに保護されている犬・猫とし、自分で保護した／拾った、他者からもらった、は保護犬・保護猫には該当しない。

2. 研究方法

現在、犬猫を飼育している人（日本在住）を対象に、インターネットによるアンケート調査を実施した（調査期間：2017年7月6日（木）～2017年7月16日（日））。アンケートの質問項目の作成およびアンケートの実施においては公益社団法人アニマルドネーションおよびゼミナールの学生の協力を得た。有効回答数は921（回答者数：959人）である。アンケート調査は、犬猫飼育者の意識や飼育している動物との出会いについての実態を明らかにすることを目的として行われた。統計解析にはIBM SPSS Statistics Version 24.0を用い、有意水準を5%とし、10%を参考とした。アンケート調査の全体像を図表1で示す。

回答者の分類は回答内容により再集計した。例えば、自分で保護したケースは本稿およびア

図表1 アンケート調査の全体像



出所) 筆者作成

アンケート調査の定義上、保護犬・保護猫には該当しないが、自分で保護した猫を保護猫として回答するケースが多くみられた。自分で保護した場合は、“猫が欲しくて飼った”というよりは“拾ったから飼った”といったように偶発的であり、保護動物を引き取る、あるいはペットショップなどから購入するという飼育行動を規定するものではないため、譲渡普及・阻害要因との関連性を見出すことは困難である。そこで、当初、回答者を保護動物飼育者か否かで分類していたが、これに加え、猫の場合は拾う／もらうという項目を追加し、回答内容により再集計した。なお、犬の場合は自分で保護した／拾っ

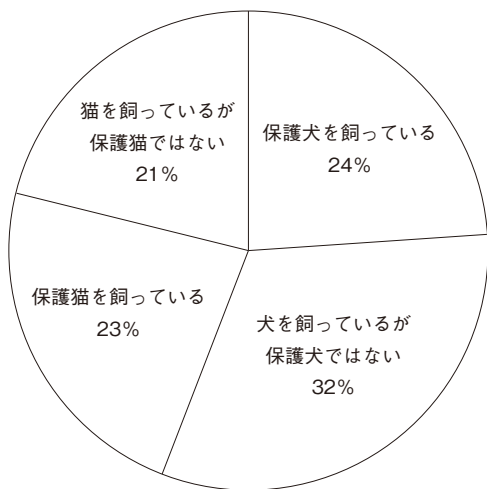
たという回答はなかった。再集計した回答者の分類および内訳を図表2、図表3で示す。

3. 保護動物飼育者と非保護動物飼育者がい だく保護動物に対するイメージの違い

保護動物に対するイメージの違いから保護動物の飼育を阻害する要因を明らかにするため、アンケート回答者全員を対象に、保護動物のイメージを9つ（「しつけがされていない」、「人を怖がる」、「人に慣れていない」、「病気や障害がある」、「医療費がかかる」、「栄養や健康状態が良くない」、「衛生的ではない」、「子犬／子猫ではない」、「雑種が多い」）提示し、これらのイメージに対し、まったく当てはまらない場合は1、もっとも当てはまる場合は5、と5段階で評価してもらった。なお、この9つのイメージは、自治体や動物保護団体の保護動物に関する情報、環境省が発行する譲渡に関する各種資料、学生によるイメージの記述および筆者の譲渡会への参加による情報収集により選出した。9つのイメージのうち、(1)～(3)は性格に関する要因、(4)～(7)は体調に関する要因、(8)～(9)は見た目に関する要因である。保護動物飼育者と非保護動物飼育者がいだく保護動物に対するイメージを犬と猫に分けて示す（図表4、図表5）。なお、保護動物飼育者とは保護犬・保護猫飼育者、非保護動物飼育者とは購入犬・購入猫飼育者を指し、購入犬・購入猫とはペットショップなどで購入した犬・猫を指す。

平均の差を検定したところ、すべて有意な差がみられた ($p < .01$)。まず犬の結果である。保護犬飼育者と購入犬飼育者では、特に(2)人を怖がる、(5)医療費がかかる、に大きな差が見られた。実際に保護犬飼育者は、購入犬飼育者と比べ、人を怖がったり、医療費はそんなにかかっていないというイメージを持っていることが分かる。すべての項目において購入犬飼育者の方が強いイメージを持っているが、グラフ

図表2 回答者の分類



出所) 筆者作成

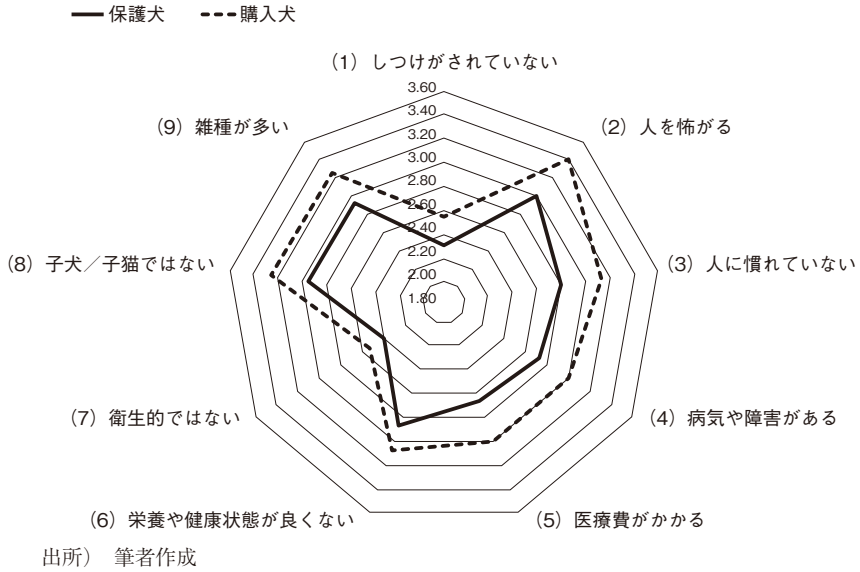
図表3 回答者の内訳

	保護	ペットショップ などで購入	拾う/もらう
犬	保護犬 (224)	購入犬 (290)	-
猫	保護猫 (214)	購入猫 (36)	拾い猫・もらい猫 (156)

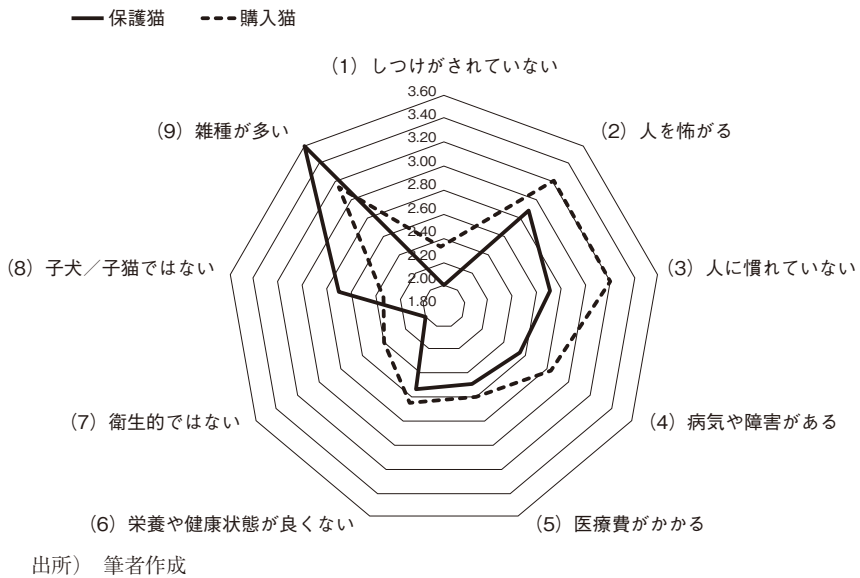
注) () は回答者の数である。

出所) 筆者作成

図表 4 保護動物飼育者と非保護動物飼育者がいづく保護動物に対するイメージ (犬)



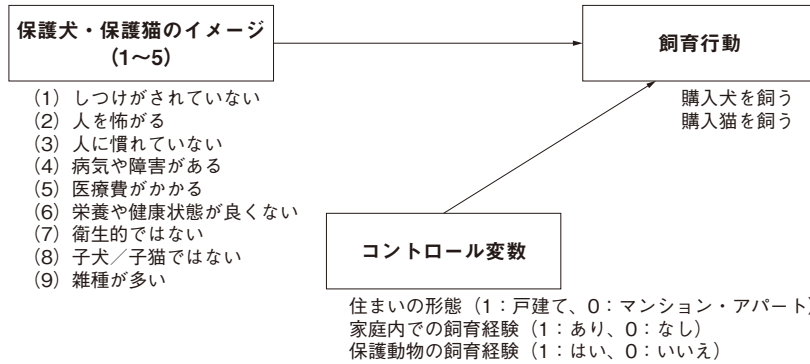
図表 5 保護動物飼育者と非保護動物飼育者がいづく保護動物に対するイメージ (猫)



の形が同じことから、程度の差はあるものの、同じようなイメージを持っていることが分かる。

次に猫の結果である。保護猫飼育者と購入猫飼育者では、(3) 人に慣れていない、というイメージで大きな差がみられた。また、犬と比較

図表 6 分析枠組み



図表 7 回帰分析

	購入犬			購入猫		
	非標準化 係数 B	t 値	有意確率	非標準化 係数 B	t 値	有意確率
(定数)	.411	5.927	***	.095	2.644	***
(1) しつけがされていない	.033	2.360	**	-.001	-.080	
(2) 人を怖がる	.024	1.279		-.015	-1.528	
(3) 人に慣れていない	-.020	-.998		.026	2.473	**
(4) 病気や障害がある	-.022	-1.285		.013	1.472	
(5) 医療費がかかる	.035	2.154	**	-.011	-1.353	
(6) 栄養や健康状態が良くない	.017	1.033		-.013	-1.540	
(7) 衛生的ではない	-.029	-1.869	*	.011	1.334	
(8) 子犬／子猫ではない	.042	3.764	***	-.018	-3.105	***
(9) 雑種が多い	-.013	-1.230		.002	.325	
住まいの形態 (1: 戸建て, 0: マンション・アパート)	-.005	-.200		-.020	-1.568	
家庭内での飼育経験 (1: あり, 0: なし)	.074	1.623		.020	.835	
保護動物の飼育経験 (1: はい, 0: いいえ)	-.559	-21.289	***	-.055	-4.064	***
調整済み R2 乗		.382			.033	
F 値		47.952			3.598	

*** <.01, ** <.05, * <.1

し、猫の場合は、(8) 子犬／子猫ではない、(9) 雑種が多い、の項目でイメージの強さが逆転している。例えば、実際には子猫を迎え入れた飼い主が多いにもかかわらず²⁾、購入猫飼育者は

2) 引き取った年齢を聞いたところ、猫の場合、生後 2~3 か月の回答が最も多かった (36.0%)。また、環境省のデータでも猫の引き取りでは幼

保護犬・保護猫には子犬・子猫がいない、というイメージを持っていることが分かる。

齢の個体が多い (環境省「犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況 (平成 28 年度)」より)。出所) https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html (アクセス日: 2017 年 10 月 30 日)

図表 8 記述統計量 (Pearson の相関係数)

項目	平均値	標準偏差	相関係数																
(1) しつけがされていない	2.282	1.0798	1																
(2) 人を怖がる	3.123	1.0730	.449**	1															
(3) 人に慣れていない	2.899	1.0287	.487**	.786**	1														
(4) 病気や障害がある	2.765	1.0094	.439**	.407**	.401**	1													
(5) 医療費がかかる	2.723	1.0766	.433**	.346**	.360**	.658**	1												
(6) 栄養や健康状態が良くない	2.818	1.1541	.478**	.474**	.478**	.545**	.585**	1											
(7) 衛生的ではない	2.317	1.1967	.504**	.426**	.469**	.494**	.533**	.711**	1										
(8) 子犬／子猫ではない	2.912	1.2397	.269**	.245**	.183**	.336**	.306**	.252**	.272**	1									
(9) 雑種が多い	3.258	1.2250	.177**	.213**	.196**	.225**	.226**	.190**	.247**	.335**	1								
住まいの形態	.607	.4887	-.028	-.045	-.012	-.033	.008	.052	.037	.022	.045	1							
家庭内での飼育経験	.915	.2786	-.004	-.038	-.049	-.048	-.017	-.011	-.024	-.025	-.022	.075*	1						
保護動物の飼育経験	.631	.4827	-.113**	-.186**	-.165**	-.148**	-.130**	-.112**	-.137**	-.117**	.052	.051	.172**	1					

** < .05, * < .1

以上のように、保護動物飼育者と非保護動物飼育者間で、イメージに差があることが分かった。そこで、このイメージが飼育行動、すなわち犬や猫を購入するのか、それとも保護動物を引き取るのか、に影響しているのかをみるため、飼育行動を従属変数とし、上記 9 つのイメージを独立変数、住まいの形態、家庭内での飼育経験、保護動物の飼育経験をコントロール変数として重回帰分析を行った(図表 6)。飼育行動(購入犬)を従属変数としたモデルの調整済み R2 乗は 0.382, F 値は 47.952, 飼育行動(購入猫)を従属変数としたモデルの調整済み R2 乗は 0.033, F 値は 3.598 である。

分析結果をみると、犬では (1) しつけがされていない ($p < .05$), (5) 医療費がかかる ($p < .05$), (8) 子犬／子猫ではない ($p < .01$) の 3 項目において有意差がみられた。猫では (3) 人に慣れていない ($p < .05$) の 1 項目において有意差がみられた。なお、犬では強いイメージのあった (8) 子犬／子猫ではないの項目において、猫の場合はマイナスとなっており、ペットショップなどでの購入の要因になっていないことが分かった。また、保護動物の飼育経験が犬・猫共にマイナスに有意であった ($p < .01$) (図表 7)。

4. 考 察

以上の分析から、犬の場合、「しつけがされていない」、「医療費がかかる」、「子犬／子猫ではない」というイメージを持っていると購入犬、すなわちペットショップなどで購入した犬を飼育する傾向にあること、猫の場合、「人に慣れていない」というイメージを持っているとペットショップなどで購入した猫を飼育する傾向にあることが分かった。また、犬猫ともに、保護動物の飼育経験があると保護動物を飼育する傾向にあることが分かった。

譲渡の普及においては、保護動物の飼育経験が重要であるが、その最初の飼育経験を妨げているのが「しつけがされていない」「医療費がかかる」「子犬／子猫ではない」「人に慣れていない」といった項目である。動物保護団体によって名称は異なるが、預かりボランティアという、保護動物を自宅で一時預かるボランティアがあり、実際の家庭で飼育し、しつけや人に慣れさせるなど、一日でも早く新しい飼い主が見つかるように活動していることも多い。今回のアンケート調査からは譲渡阻害要因として導出されたが、しつけや人に慣れるといった時間をかければ解決される可能性がある項目に関しては、実際にやっている団体も多いが、それが飼育者に伝わっていない可能性が指摘できる。した

がって、飼育者へ取り組みを知らせるとともに、丁寧な説明により、理解を深めることが譲渡の普及には重要であろう。また、譲渡では実際に犬では成犬の引き取りが目立つが、子犬・子猫への需要が高い³⁾。そのため、犬においては成犬を飼育することのメリットの普及も重要である。

5. おわりに

本稿では保護動物に対するイメージの違いから保護動物の飼育を阻害する要因をアンケート調査から考察した。そして、譲渡の普及においては、保護動物の飼育経験が重要であるが、その最初の飼育経験を妨げているのが「しつけがされていない」「医療費がかかる」「子犬・子猫ではない」「人に慣れていない」といった項目であることを指摘した。

アンケート調査では保護動物の存在を知っているにもかかわらずペットショップなどで購入した飼育者を対象に、保護動物を引き取らなかった理由を聞いている(選択式、複数回答可)。そもそも検討をしていない飼育者もいるが、注目すべき点が2つある。

第1にその他における自由記述において、「犬を飼うようになって初めて保護犬や譲渡会などの情報を気にするようになった」「昔はペットショップから買うのが当たり前、今ほど譲渡が普及していなかった」という回答である。現在では自治体のみならず動物保護団体でも譲渡会が開催され、ウェブでも保護動物の情報が容易に入手できる環境にある。殺処分の問題が認知されつつある中、保護動物に対する潜在的な飼

い主の存在が指摘できる。

第2に条件的に引き取らせてもらえなかったという回答である。自由記述では「条件が厳しいというイメージ」や「(共働きや一人暮らしなどの理由により)無理だと思ったから」という回答が目立つ。実際に、一人暮らしや共働き、子供がいる家庭、高齢者には譲渡しないとする動物保護団体も存在する。再度飼育放棄を防ぐために譲渡においては厳しい基準を設けることも必要であるが、超高齢社会、単身世帯の増加という社会構造をふまえると、譲渡の普及においては条件の緩和の検討も求められるであろう⁴⁾。

主要参考文献

- 一般社団法人ペットフード協会 (2016) 『平成 28 年全国犬猫飼育実態調査』
- 環境省 (2006) 『譲渡支援のためのガイドライン (平成 18 年 3 月)』
- 環境省 (2011) 『動物の適正譲渡における飼い主教育』
- 環境省 (2016) 『譲渡でつなごう! 命のバトン』 (パンフレット)

謝 辞

筆者は東北大学大学院経済学研究科博士課程(前期・後期)において大滝精一教授の指導を受けた。既存研究がほとんどないペットに関する研究をすることを許し、指導してくださった。大滝先生のご指導なくしては現在の筆者は存在しない。記して感謝申し上げます。

3) 「一般的に、各センターでの譲渡は子犬・子猫の方がもらえる率が高く、多くの犬・猫が欲しい方の考え方として、『子犬・子猫の方が早くなつき、育てやすく、しつけもしやすい』という思いが強いのが現実です」。(環境省, 2006, p. 10)

4) この点については環境省 (2011) pp. 16-17 に具体的な緩和策が書かれている。